

## お盆の朝

渡邊 一矢

僕が生まれる前、僕の母が独身の頃の体験談です。

母の実家では、お盆になると居間に白壇を作つて仏壇にあるもの全部そこに移し替えます。他にも押入から木魚、お経の掛軸、上質な座布団を出します。盆入りの日は、休みなのに朝早くからその移し替え作業を始めるそうです。

その日は、よく晴れて朝から暑く、全ての窓を開けて網戸にしてみました。居間横の廊下には、大きな窓の下のサッシ部分がベンチみたいに出っ張りがあつて座れるようになっています。高台に建てられているので、長閑な地方都市の街並びが一望できます。

祖母が朝食の準備を、祖父と母が白壇の設置とお供え物の用意をする事になっていました。白壇の設置といつても、ダンボールを雛壇のように設えて白布をかける簡単なもので、重さに偏りが無いように仏具を置いていきます。

立ったり座ったり、中腰になって作業するので、母

は汗だくで準備をしていました。いつからか窓際に気配があり、てつきり祖父だと思つた母は顔を上げて、

「サボつてないで手伝つてよー」と、窓際に向かって文句を言つたそうです。

そこには白いランニングシャツ、白いステコ姿の白髪交じりの中肉中背の初老男性が、サッシに腰掛け景色を見ていたそうです。片足を組み頬杖ついたその姿は、自分の父そのもの。

けれど、次の瞬間。母の背後でガチャーン！と、すごい音。何かと振り返つた母は目を睜りました。

そこには御盆に載せた物を全てひっくり返して、腰を抜かした実父の姿。母は状況が飲み込めないまま、反射的に窓際に視線を戻しました。

大きな音に窓際の人物も、居間の方に顔を向けていました。二人の注目を浴びる中、文字通り煙のようにゆっくりとその人は消えたと言います。

「今の…」と母が言葉を探していると、青ざめた祖父が掠れた声で「俺の親父だ。」と呟いたそうです。

遺影の写真には、縁側に座っていた人の顔が。

その年から、お盆の準備は祖父が率先して行つています。